大正後期の信濃教育会下伊那部会における図画科教育研究

－教育思潮、教授方法の「咀嚼・改革」の観点から－

The History of Teachers' Research on Drawing in *SIMOINA BRANCH OF SINANO KYOIKUKAI* in the latter half of Taisho Period

－With a Special Focus on the Process of Appreciation and Reformation of New Educational Trends and Methodology－

奈良教育大学　宇　田　秀　士

Ⅰ．はじめに

本稿は、本学会誌第30号で発表した内容[1]の続編にあたる。前稿では、明治大正期の下伊那部会における手工科・図画科教育研究について、教育思潮、教授方法の「摂取・消化」の観点から考察した。萌芽期研究という性格から明治20年（1887）から大正８年（1919）までの約30年間を視野に入れたが、下伊那部会の活動内容から、「①草創期」明治20年代前半、「②整備期」明治36年（1903）－大正４年（1915）頃、「③充実期」大正４年（1915）頃－大正８年（1919）の３つの時期に区分し、特に「②整備期」に力点をおいて考察した。これに対して本稿は上記の「③充実期」に続く大正後期の図画科教育研究活動を対象にする。

この大正後期は、「③充実期」の発展と考えられるが、「充実期後半」としてあえて区分して捉える。第２回児童自由画展開催以後であり、木下茂男（紫水）と山本鼎との関係を軸に全国的な規模の活動も展開されるからである。本稿では、地方教育会における「整備期」→「充実期前半」→「充実期後半」という段階を意識し稿を進める。また、教育現場の「摂取、消化」の段階（「整備期」）から、「咀嚼、改革」の段階（「充実期」）への移行を支える内的ビジョンに注目する。特に龍丘小学校における内的ビジョンとしての宗教的な基盤を取り上げ考察したい。

Ⅱ．整備期「摂取、消化」から、充実期「咀嚼、改革」への流れ－教育思潮、教授方法の受容

１．下伊那部会と座光寺小学校の購入図書目録から

下伊那部会の活動事例は、教育現場が、教育思潮、教授方法を受容するには、「摂取、消化」の段階があり、その後に「咀嚼、改革」が起る可能性がある、ということを示している。前稿で述べたように、改革への刺激を与えた一つの契機は、大正４年（1915）９月の長野県内連合教科研究会手工図画研究会への木下、伊藤眞之助らの参加であると考えられるが、もし仮に「摂取、消化」活動での十分なレディネスがなければ、これが刺激になったとは考えにくい。

教育思潮の受容については、赤木（1991）が指摘するように、既に描画の捉え方は明治初期においても、少なくとも翻訳教科書というメディア上では、受容され、教育関係者に利用可能な情報として存在していた[2]。では、実際に下伊那部会の教師達は、明治から大正前期にかけて、どのような著作を通じて受容しようとしていたのだろうか。

明治45年（1912）６月の下伊那教育品研究所『図書目録』、大正５年（1916）10月及び大正７年（1918）３月の下伊那教育研究所「購入図書目録」、「座光寺学校資料目録」には、以下のような著作[3]がみられる。

木村想平『寫生畫新教授法』、波多市松『子どもの研究』、岡山秀吉・阿部七五三吉『圖畫手工聯絡教授実際』、谷本富『楠公ト新教育』、図画教育会長野支部『色彩の研究』、小室信藏『一般圖按法』（以上『図書目録』より抜粋）、佐々木吉三郎『世界の大勢と大正教育の方針』『教育的美學』、東京高等師範學校附属小學校『各科教授細目』、吉田熊次『独逸の教育』、岡山秀吉『欧米諸国手工教授の実況』、白濱徵『新定畫帖の精神及其利用法』、高島平三郎『兒童の精神生活』、秋吉安治『最近の米國』、中島半次郎『人格的教育學と我國の教育』『教育學説の進化』（以上「購入図書目録」より抜粋）、小山正太郎『小學習畫帖甲種』、橋本雅邦『小學毛筆畫甲種教員用』（入門二冊）、石原和三郎・一条成美『黒板畫譜』、遊佐誠甫・柿山蕃雄『教材繪畫捷形（動物・植物）』（以上「座光寺学校資料目録」より抜粋）

各師範学校附属小の教授案、白浜、小室、阿部などの手工科・図画科の著作の他に、当時の欧米の教育学、心理学の移入がみられる。佐々木吉三郎（1872－1924）が自らの留学経験を生かした『世界の大勢と大正教育の方針』（目黒書店、大正４年）並びに『教育的美學』全３巻（敬文館、明治44年－同45年）や中島半次郎（1871－1926）が、ジョン・アダムズ（John Adams 1857－1934）の *The Evolution of Educational Theory*, 1912 を翻訳した『教育学説の進化』（文明書院・隆文館図書、大正６年）などが、その代表的なものであろう。

また、児童期の研究については、中嶋力造序、波多市松『子どもの研究』（実業之日本社、明治42年（1909）３月）がある。長野県飯田高等女学校長、県立大分高等女学校長を勤めたという波多の自序には「普通心理学の順序方法に據りて、科学的に説明せられたる児童心理学は、其効果の少なかるべきを思ひ、此に主として、「ぜえむす、さりい」

博士の著、「子供の仕振」(Children's ways) を参考にし、子供の性質中にて、最も大切にして、日常ありふれたる興味ある事柄につき、一々実例に訴へ、出来得る限り、通俗的に分かりやすく、之が説明を試みた。」とある。

上記の「ぜえむす、さりい」博士とは、美術史家コッラド・リッチ（伊　Corrado Ricci, 1858－1934)、心理学者ベルナール・ペレ（仏　Bernard Perez 1836－1903）とともに、子どもの絵について最初に研究したとされる図画教師エベネザー・クック（英　Ebenezer Cooke）の成果を取り入れ、子供の描画の発達段階をまとめたロンドン大学心理学教授ジェームズ・サリー（英　James Sully, 1842－1923）のことであろう[4]。彼は1895年に出版した『児童期の研究』（*Studies of Childhood*）において、描画発達段階に関する考察を初めて著した。波多の自序にある「子供の仕振」(Children's ways) は、*Children's Ways*, Longmams, Green, London, 1897 [5]のことだと考えられる。「第12章幼少なる画家」では、はじめに「最初の絵画と遊戯」「幼児の落書は絵画の始まりである」「子供の研究に付ての心得」という３つのキー・センテンスで、稿全体を説明した後に、４つの節を設け、図を挿入しながら、なぐりがき、顔や人の描き方の発達段階などを説明し、幼少期の描画の主な特質をまとめている。

赤木 (1992、1993) [6]によれば、明治20年 (1887) 前後には、教育関係の雑誌や欧米の教育心理学説が次々と翻訳紹介され、明治31年（1898）11月創刊の月刊誌『児童研究』には、J・サリー、心理学者S・ホール（米　Graville Stanley Hall 1844－1924）など、欧米の児童研究の動向が、ほとんどタイム・ラグを感じさせないほどに網羅されていたという。この『児童研究』を創刊した高島平三郎（1865－1946）は、明治29年（1896）より同31年まで長野県尋常師範学校に勤務しているが、長野県内の小学校での実験を基にした報告を『児童研究』誌上に発表している。

さらに赤木（1993）は、高島の影響は当時の長野県師範学校の図画教師であり『図画講話』の著者の志賀静山（明治30年８月－37年５月勤務）やその後任である芳川廷輔（明治37年５月－大正６年１月勤務）にも与えているのではないかとし、「このように、長野において、師範学校を中心に児童研究運動の雰囲気がかなり濃密に醸成されていたのは、高島の残した影響なのではあるまいか。」[7]と指摘した。

実際にどこまで、これらの著作の意図を汲んだのかということは不明であるが、情報を得る機会は存在したといえる。

２．下伊那郡龍丘小学校での「新教育」研究

自由画教育運動との関係で資料が残されている龍丘小学校の学校日誌には、以下のような記述が見られる[8]。

・大正４年６月５日	綴方研究会飯田学校ニ開校(ママ)、本校ヨリ橋爪福弥氏出席
・同年７月10日	談語(ママ)会下平義臣氏ノフランソワミレー作晩鐘
・同年７月19日	本日ヨリ中山君ノ分団式動的教育法講演ヲ始ム　竜江、下川路ノ先生モ隣席
・大正５年７月25日	談語(ママ)会　飯田学校訓導ヲ聘シ唱歌ノ新傾向ニ対スル講演ヲ乞フ
・大正６年４月10日	職員会　本日ヨリ訓導小池澄ニ依リ教育界及教授会ノ新傾向ニツキ講演会ヲ開ク
・大正７年５月28日	図画展覧会　午後ヨリ開催各教室ニ於テ飯田学校生徒其他近傍学校職員ノ来観アリ
・大正８年２月15日	時代思想研究会　飯田小学校　下平校長　小池訓導
・同年４月26日	講演会北原白秋、太田水穂両氏ノ来郡ヲ機トシ天竜俠ニ於テ講演会ヲ開ク
・同年８月22日	来校者長野師範学校附属小学校主事杉崎氏来観午後ヨリ同氏ニ依頼シ講演ヲナス　小林洋吉氏中田鐐氏　職員講会
・同年９月５日	飯田小学校ニ文学博士柳宗悦ノ「ブレークノ絵画ニ現ハレタル宗教」ナル題下ニ講演アリ　職員中参会スルモノ多シ

このように、龍丘小学校や飯田小学校における当時の最新の教育思潮や芸術教育への取り組みの様子が伺える。上記以外にも龍丘小学校の購入図書として、『リーンハルドとゲルトルート』（ペスタロッチ、三宅朽木訳）や『現代思潮と教育』（稲毛詛風）と考えられる題名が『学校日誌』に記録されていたり（大正４年２月16日）、木下茂男自身が、『現代教育教授思潮』（乙竹岩造、目黒書店、大正３年(1914)）を実際に読み、書き込みを入れて読んでいたという事実[9]もある。こうした取り組みの下、自由画教育への道が模索された。また同時に大正７年頃には下伊那教育研究所が「自由主義的気分教育の台頭によって、自然閉鎖の形」になり『研究所報』も大正７年（1918）３月限りで廃刊になっている[10]ことも状況として見逃せないといえる。

III．「充実期後半」－自由画教育運動との関わり

「充実期後半」（大正後期）の下伊那部会の図画科教育研究略年譜を次頁に作成した[11]が、資料的には、やはり龍丘小学校関連が多く、それを中心とした略年譜となった。この年譜にそって、活動の概略をおさえておく。

自由画教育運動の具体的な出発点は大正７年（1918）12月の長野県小県郡神川小学校での山本鼎の講演であり、翌８年４月には、第１回児童自由画展が開催された。この時

大正後期信濃教育会下伊那部会図画科教育研究略年譜-龍丘小学校を中心に

年月	事項	図画科教育関連内容
大正8年9月 (1919)	・第七支会主催 第２回児童自由画展覧会開催	・9月24日～27日　山本鼎(提唱者)、谷好夫(報知新聞記者)、片上伸(早大教授)、久保田俊彦(島木赤彦、信濃教育会)来校。自由画作品の鑑別・陳列、講演、一般公開などを行う。　於：龍丘小学校
大正9年4月 (1920)	・東京児童自由画展覧会参加	・4月2日～9日　日本児童自由画協会主催　東京日々新聞社協賛 龍丘小学校などから出品。　於：東京赤坂溜池三会堂
9年7月	・会員自由画講演	・木下茂男　7月1日　於：飯田高等女学校、7月2日　於：中村小学校
9年8月	・会員雑誌執筆	・木下茂男「拓かれたる心」 (樋口勘次郎『帝国教育』第457号、帝国教育協会、大正9年8月号)
9年9月	・会員自由画講演	・木下茂男　於：富草中学校　第六支会の要請による。
9年10月	・自由画教育調査	・愛知県名古屋市視学官板垣氏他1名が自由画に関する研究調査のために龍丘小学校に来校。
9年12月	・会員の全国的組織への参加	・12月26日　日本自由教育協会(大正8年7月設立の日本児童自由画協会を改称)が設立し、翌年1月創刊のアルス社『芸術自由教育』を編集。木下茂男は、大正9年3月頃、協会員の一人となる。
大正10年1月 (1921)	・児童自由画教育研究会開催	・1月27日～29日　於：座光寺小学校　龍丘小学校では、1日目に下平芳太郎校長以下8氏出張、2日目は、尋常5年以上の児童が職員の引率の下に児童自由画展覧会を参観。3日目は、山本鼎が来訪、講話。
10年3月	・会員講演 ・会員執筆	・木下茂男　自由画に関する講演　於：飯田小学校 ・下平義臣「児童自由画の徹底的使命」（『芸術自由教育』3月号）
10年7月	・会員執筆	・木下茂男「ふみさんの絵と歌」（『芸術自由教育』7月号）
10年8月	・会員、芸術教育夏季講習会にて講演	・8月1日～7日　木下茂男　芸術教育講習会にて、山本鼎、北原白秋、島崎藤村らとともに、講演「児童自由画の経験談」及び児童画展示。 於：長野県軽井沢星野温泉、主催　日本自由教育協会
10年12月	・山本鼎著『自由画教育』に掲載	・龍丘、座光寺、松尾、鼎、飯田の各小学校の教育活動や児童作品が紹介された。(「自由画を行いつゝある学校」、口絵など) ＊大正10年度中　第七支会　講演会　弘田竜太郎、岸辺福雄
大正11年 (1922)	・児童画研究会 絵画講習会開催	・絵画の要素特に線条についての講習会 河西省吾　主唱者　小池澄、木下　宮脇理一、坂牧宗司 ＊大正8年頃、児童画研究会(代表小池澄)誕生。
大正12年2月 (1923)	・国際交驩児童自由画展覧会開催	・全国自由画研究会と教育部会との共催、東京日日新聞社飯田通信部後援、東京日日新聞社の収集。世界各国約3000点3日間　於:上郷小学校
12年4月	・芸術教育講演指導	・龍丘小学校に4月12、13日　野口雨情、中山晋平が来校、指導、講演。 4月14、15日　岸辺福雄が来校し、生徒、村民に講演。 ＊大正12年度中　児童画研究会　美術講習会開催 河西省吾　我国上代美術の伝統並に特色
大正13年 (1924)	・綴方、文芸講習(演)会	＊大正13年度中　鈴木三重吉　綴方講習会 石丸悟平　文芸講演会　　於：龍丘村
昭和2－3年 (1927-28)	・第二支会 図画講演会	＊昭和2－3年　講師　森田恒友

期、龍丘小の木下茂男は、本誌前号で述べたような下伊那部会での活動(『図画科教授細目』『尋常小学新定画帖詳解』などの編纂）を経て大正７年４月入学の１年生から自由画的要素の強い実践を教育を始めたという[12]。こうした実践を行う中で、神川での第１回児童自由画展に感激して山本に手紙を送り、逆に山本から第２回展の開催を呼びかけられている。(「山本鼎の手紙」同８年５月22日付[13])

第２回自由画展を開催してからの木下は、全国的な規模の活動に参加することになる。例えば、大正９年（1920）３月の「山本からの手紙」[14]には、日本児童自由画協会の会員として、「片上伸、岸部(マヽ)福雄、山本鼎、金井正、木下茂男、石井鶴三、山越脩蔵、谷好夫、長原孝太郎、坂本繁二郎」の10名があげられ、木下が協会員となったことが記されている。『芸術自由教育』２月号に掲載された「日本に於る自由画教育運動の経過」によれば、この協会の最初の結成は大正８年７月であり、山本、片上、岸辺、長原、谷、金井、山越の名が協会員[15]としてあげられ、その後に木下、坂本らが追加されたようである。

さらに、この協会は、大正９年12月26日に協会に在京会員を集め、「日本自由教育協会」と改称することと、北原白秋、弘田龍太郎、足立源一郎、山崎省三、北原鉄雄、斎田喬の協会員への推薦を決定している[16]。単に図画教育だけではなく、教育全体に自由画の精神を及ぼそうという山本の精神を反映したものといえるが、翌10年（1921）１月より発行の前述『芸術自由教育』の編集母体ともなった。

この頃の龍丘小の授業の様子については、誌面の関係上、ここでは詳しくはふれないが、木下が、記者の問いに対して答え、記したという「拓かれたる心」[17]によれば、「近頃ではもう学校で絵をかく者は甚だ稀」であり、「画の大部分は、日曜日若しくは放課後に描かれたものである」という。授業という枠の中ではなく、自主的な活動の中で制作することを奨励したようである。

大正９年は、東京、大阪で新聞社の関与した大きな展覧会が開かれた。大正９年４月２日～９日には、東京赤坂溜池の三会堂で、日本児童自由画協会主催、東京日々新聞社協賛の児童自由画展覧会が開催されているが、審査員として、長原、石井、坂本、平福、岸辺、山本が選にあたり、多くの観客を集めたという[18]。応募画約57,000点のうち、９割が模写的絵画であっり、残りの約6000点がいわゆる自由画で、その中からさらに会場に収容できる1200点までに絞った。龍丘小学校の作品は、200点が全部入選して、名を知られるようになったというが、実際には、山本が龍丘小学校の作品を借りたというところが本当のようで、大正９年２月の東京神田兜屋画廊、大正10年２月の高崎市有志主催の展覧会にも作品出品の依頼がなされている[19]。

翌大正10年（1921）には、前年のように新聞社が協賛するような大規模な展覧会はないが、小規模の展覧会が各地で開催された。下伊那郡でも、１月27日～29日の３日間座光寺小学校で自由画教育研究会が開かれた。「龍丘小学校日誌」によれば、１日目は下平芳太郎校長以下８氏が出張したとある。また２日目は、尋常５年以上の児童は職員の引率の下に座光寺小学校の児童自由画展覧会を参観とあるが、木下の『芸術自由教育』７月号掲載文によれば龍丘小学校の作品も出品されていたようである。３日目には、山本が来訪したが、自由画展には1000余点が７室に陳列してあり、82名の参会者があった[20]と山本自身ふり返っている。

同年８月１日より７日まで、芸術教育夏季講習会が長野県軽井沢星野温泉で開催している。講師は、山本、岸辺、片上、北原、畑耕一、木下、山崎、弘田らの協会員と島崎藤村であった。また、科外として、内村鑑三、沖野岩太郎の話もあった。『芸術自由教育』９月号に掲載された参加者アドレスによれば、一般参会者は、小学校教員が主で、満州、朝鮮からの参加を含め、136名であった。下伊那郡からは、伊賀良小の今牧武志、龍丘小の小林八十吉ら４名の名が記されており、木下も、「児童自由画の経験談」という題目で発表し、同時に児童画展覧会も開催している。

同10年12月には山本が、自身のそれまで各雑誌で発表した原稿を集めて、ARS社より『自由画教育』を刊行した。下伊那郡関係では、龍丘を初めとして、座光寺、松尾、鼎、飯田の各小学校の教育活動や児童作品が紹介されている。前述の「新教育」に対する取り組みもあわせると、龍丘小だけが突出して活動を行っていたわけではないようだ。また大正８年頃には児童画研究会も発足し、大正11年(1922)、12年（1923）には、絵画講習会、美術講習会を開き、河西省吾（金原省吾1888―1958）を講師として招いている。

下伊那部会では、明治末期からの手工科・図画科研究を通じて、自由画をはじめとする芸術教育に対する研究の下地はあったわけだが、木下－山本の関係を通じて、全国的な活動への参加や中央から講師を招いての講演を通して、一層それが高まったのが、大正後期であると考えられる。

また、次章でふれるが、こうした活動は、地域の青年会層、有識者層をも巻き込んでいくこととなった。

Ⅳ．龍丘小学校の内的ヴィジョン－宗教的な基盤

「充実期後半」の活動の中で自由画教育や芸術教育の取り込みを概観した。下伊那部会の活動をふり返り、明治末期から大正初年度にかけての教育思潮、教授方法を「摂取・消化」した「整備期」、それらを「咀嚼・改革」し始めた「充実期前半」（大正４年頃－大正８年）と比べると、かなり大

胆な試みが行われていることに気づく。しかも、そこには、単に外来の思潮を取り込んだだけの形態ではなく、それを内面から支える精神的な基盤の存在を感じる。この事について、この期の活動の中心である龍丘小学校の事例で考えてみる。龍丘小学校の精神的基盤、内的なヴィジョンは、どこにあったのだろうか。

龍丘小学校の教師達並びに村の青年会、有識者層の活動を青年会自主化運動の視点から捉え、同じ郡下の千代小学校と比較したのは大串隆吉（1980）[21]である。彼は「1910年代末から20年代中頃にかけての長野県下伊那における、青年の手で青年会を運営しようとする青年会自主化運動と小学校自由教育運動との関わり」の検討を行った。

大串のまとめによると、青年会は、自主化運動が起る以前には、小学校教師の関わりによって自由教育の影響を受けていた。それは、龍丘小も千代小の場合も同じだったが、龍丘小の方がより直接的に影響を与えていた。龍丘小の自由教育は芸術教育運動が中心で、精神の世界において自由な創造性を強調したが、それは、青年会員のなかにあった短歌運動における個の主張と共鳴して、青年会に影響力をもったという。さらに、こうした一連の動きの中で龍丘村青年会が、「自主化され社会運動に進出した下伊那郡青年会」を早期に脱退し（大正12年（1923）２月、会長中田美穂）独自な道を歩んだことを捉え、その理由を宗教的基盤（特に仏教）にあったとする。そして、その仏教を中心とする宗教的基盤こそが、結局、龍丘村青年会が、修養団体から脱却することができなかった理由としている。

大串の分析・まとめは、農村における青年会自主化運動、社会主義的青年運動の成立の過程を考察するものであり、自由教育が必ずしも中心に置かれているわけではない。しかし、農村における自由画教育または自由教育を考える上においては、貴重な示唆を含んでおり、これを基礎におき事実[22]を整理し、その後に、図画教育、芸術教育の「咀嚼・改革」段階における内的ヴィジョンの関わりについて若干の考察を付け加え、まとめとしたい。

龍丘小学校では、芸術教育に力が注がれ、自由画は、木下、綴り方・童謡は、橋爪福弥、童謡・音楽教育は、小林八十吉が中心になっていたという。木下と同様に橋爪も『赤い鳥』の影響を受け、児童作品の投稿を行っていた。学校内の雰囲気は、教員たちが、下平校長（椋平）、小池教頭（杜かげの人）、木下茂男（紫水）、下平義臣（羊我）、橋爪福弥（白川）、牧内雅博（榎村）といった具合に互いに、短歌の雅号で呼びあうような雰囲気であったという。

また、地元の出身の教師も多く、村内の青年会とは親密で、謄写版刷の文芸誌『ポプラ』を通じて交流していた。岡村二一（笛人）、中田美穂（落穂）、岡村誠一（夢人）らは、学校職員と平素交流し、前述の『ポプラ』に短歌や自由詩を投稿する他、学校教員との研究活動を行い、児童自由画展覧会におけるアーチ造り、展覧会場の手伝い、講演会の宣伝ポスター貼り等で応援したり、大正12年４月には、野口、中山、岸辺を招いた芸術教育講習会を開催している。

さらに村の有力者・有識者層の協力もあり、自由画展の教室の木綿茶色幕に対する膨大な費用も、有志の特別寄付によるものであった。下平校長は、校長住宅において、これらの小林洋吉、岡村勝太郎、中田幸らと、毎月13日には意見交換を行う「13日会」を 設けている。

宗教的基盤については、木下、小林八十吉らは仏教徒、橋爪福弥、下平義臣、小島良造らはキリスト教徒であった。明治以来、仏教とキリスト教は、布教の面で互いに張り合ってきており、その対立が心配されるところであるが、先にみた『ポプラ』を中心とする短歌サークルが、その交流の場になっていたようである。木下は、若いとき画家志望であったが、家の事情でそれを諦めざるをえなかった。下平義臣や上記の村の青年会の中田美穂にも類似の事情があり、共通した心情があったのではないか、と大串は指摘する。明治から大正にかけての「家」意識から派生する農村における青年の生き方の悩みといったものが、短歌を通じた交流によって昇華され、精神修養や教育活動に結びついていったのではないか、と考えられる。

龍丘村の仏教活動の中心は、念通寺（浄土宗）であり、住職下平諦音は、日曜学校と仏教会を組織していた[23]。日曜学校は、念通寺で、仏教会は、念通寺や字ごとに行われていたが、この日曜学校では、教師の木下や小林、村の有力者中田幸が説教を行い、小林が歌唱指導をした。小林の回顧によると、1911年頃の「ポプラの会」で、木下から日曜学校をつくったら、協力してくれないか、と言われたといい、始まりは、その前後ではないかと考えられる。

斉藤昭俊（1989）[24]によれば、仏教日曜学校は、明治５年（1872）博多万行寺の児童念仏講、明治13年（1880）増上寺の少年講、明治17年（1884）萩の本派本願寺別院の少年教会などに始まっているという。

明治38年（1905）、安藤正純の『仏教修身読本』が日曜学校教材として、明治44年（1911）には高楠順次郎の『統一仏教日曜学校教案』がそれぞれ出版される。大正２年（1913）には、本派本願寺が日曜学校設立を同派全寺院に呼びかけ、大正８年（1919）には、大谷派が『児童と宗教』を刊行している。そして、大正14年（1925）には、仏教日曜学校協会が組織されて月刊『宗教教育』が刊行された。

このように仏教日曜学校は、キリスト教日曜学校の影響を受けながら、同時にしかも着実に発展した。そして、日曜学校の方法として、従来の礼拝や法話の代りに童話を中

心におく新しい形態が発生してきたために、仏教童話・童謡が教材として必要となり、仏教の立場からの童話雑誌が相次いで発刊されることとなった。明治40年代の『日曜日』、大正４年（1915）の『日曜教園』、大正10年（1921）の『仏教童話』、大正11年（1922）の『金の鳥』などがそれである。特に『金の鳥』においては、子どもの投稿欄が、創作童話、童謡、綴方、和歌、俳句、自由画、清書の７領域にわたって開かれ選評が行われていた。仏教系の児童文化運動[25]とでも言うべきものが存在したのであった。

日曜学校の他、大正14年２月に始まった[26]龍丘「母の学校」にも木下が関わっている。小林八十吉の回顧[27]によれば、子どもの教育のためには、親、郷土を教育していくことが大切であり、計画の上、村の人たちとも協力して、農閑期には、いく晩も各部落を巡回して歩いたという。その他、小さい子どものおもりをする子守の教育会、幼児の指導をするために、小児科の医師を招き、検診をした。

これに対して、龍丘のキリスト教は、飯田メソジスト教会に属し、龍丘村長野原で日曜学校を開いていた前述の村の有識者小林洋吉が中心となる。小林は、20歳代末に飯田メソジスト教会に入門、洗礼を受けている。その後東京専門学校（現早稲田大学）に進み、帰村後、明治42年に英国人宣教師バックストンの宗教的人格にひかれて、関西、九州方面に求道旅行、以来、何度か純福音の修養会に出席し学んでいる。この前後にキリスト教日曜学校を起し、礼拝のために自宅を開放している[28]。

また、下平義臣は大正４年（1915）頃からキリスト教の信仰に入り、同６年２月に洗礼を受けているが、『芸術自由教育』３月号に「児童自由画の徹底的使命」と題する文章を寄せている。自由画の提唱者である山本らの「自由画の精神は同時にあらゆる人間生活の根本精神である」を受けて、「私は『芸術とは、人類の特殊的感情を離脱し人生共通の生活を営む人類によって感嘗されたる、宗教的良心の上に発作する感情、少しの除外もなくして人類に感受さるべき感情の表現である』といった、トルストイの言葉と『すべての美は神の美である』といった、ホーンの言葉をそのまゝ、肯定する限り、美の極致が聖であり、芸術の極地が宗教であると信ずる限り、私は確信する、そして大胆に言ふ。自由画精神の徹底はイエスである。その完成はクリストでなければならない。」としている。

この下平と同じように、木下も「芸術が何であるか、子供が何であるか、人間が何であるか、宗教が何であるか、其れが根本的に理解されていない教師には自由画も消滅する、歌も詩も消滅する、総てが消滅する、要は人其人に存す、末梢の事に腐心するを止めて速かに源泉に還る事である。」（『芸術自由教育』７月号）という文章を残している。宗教的基盤に支えられた思考の上に、芸術を中心とした自由教育が置かれ、さらにその一部に自由画は位置づけられ、実践されていたとみた方がよいのかもしれない。

ところで、先の大串は、龍丘村のキリスト教の影響は、中心人物だった小林洋吉のいた同村長野原に限られていたと推定し、龍丘小の自由教育実践においては、仏教の影響が強いとまとめている。そして、その根拠のひとつに、大正13年（1924）９月の松本女子師範附属小の川井訓導事件、飯田小事件をあげている[29]。県当局の白樺派、地上派教師潰しの意図があったというこの事件では、両小学校ともに、視察した東京高等師範学校教授樋口長市（県臨時学務委員に委嘱）に授業内容などについて「攻撃」されている。

ところが、９月３日の飯田小訪問の前日、龍丘小も訪問を受けているのであるが、特に問題にされていない。もちろん、龍丘小が飯田小と違い、郡の中心でなかったこともあるが、自由教育が一様でなかったように、「攻撃」の矛先も自由教育の中の「白樺派、地上派」に絞られていたという。龍丘小学校の自由教育は、仏教の影響力の方が、強かったからこそ、白樺派や地上派とは異なった位置にいたとみなされ、龍丘小学校そのものは攻撃されなかったのではないか、と指摘する。大串の考察については、さらに継続して検証をする必要があると考えられるが、いずれにせよ、宗教的基盤の重さには注目しなければならないだろう。

ここで本稿を締め括るにあたり、前号と併せ明治末期から大正期の下伊那部会の活動を顧み、これと大正後期の龍丘小学校の内的ビジョンとの関わりをまとめてみる。

1、下伊那部会での明治後期よりの講習会、講演会、『尋常小学新定画帖』の研究、「新教育」思潮の研究などを通じて、教育思潮、教授方法を「摂取・消化」し、教育研究の下地（レディネス）の形成が行われた。

2、大正４年（1915）の県内連合教科研究会手工図画研究会の雰囲気、当時の下伊那郡のいわゆる「気分教育」の台頭などの雰囲気には、もちろん刺激を受けており、「咀嚼・改革」への志向が芽生えている。

3、しかし、大正期後期の龍丘小の基盤にあるのは、仏教ないし、キリスト教の宗教的基盤であり、その精神修養的色彩は、短歌のサークルを通し、農村青年の個の悩みとも重なり、学校－青年会－村の有識層をまとめた。自由画教育、芸術教育は、単なる教授方法の一つではなく、精神性が投映された活動であった。

4、龍丘小における内的なビジョン、特に仏教的基盤が示唆するのは、この教育実践が、明治期以来の欧米教育思潮を一方的に取り入れる形での「近代化」に対して、いわば「土着」の意識と結びついた改革であるということだ。むろん、仏教思想それ自体は外来のものであるにせ

よ、地域での教師たちの活動や日曜学校での取り上げられ方は、「国民意識の向上」の色彩も強かったと考えられるからである。

以上４つの項目うち、１、２、３に関しては、前号と合わせてほぼ資料を揃え、考察することができたといえる。また、４に関しては、継続的な資料調査を行うとともに、大正自由教育の総合的な捉えなおしやその後の歴史の展開をふまえて、さらに考察を続けていきたいと考えている。

註

1）宇田秀士「明治大正期の信濃教育会下伊那部会における手工科・図画科教育研究の萌芽」『大学美術教育学会誌』第30号、1998年２月

2）赤木理香子「明治初期における欧米美術教育情報の受容について」『美術教育学』第12号、1991年３月

3）下伊那教育品研究所『図書目録』1912年６月、下伊那教育研究所「購入図書目録」『研究所報』第12号、1916年10月、同第15号大正1918年３月、『座光寺小学校沿革史』1965年、574-575頁

4）ステュアート・マクドナルド（中山修一ほか訳）『美術教育の歴史』玉川大学出版、1990年10月、427-447頁

Stuart Macdonald, *The History and Philosophy of Art Education*, University of London Press, 1970

5）同上翻訳書527頁「参考文献リスト」を参照。

6）赤木「近代的自然観と美術教育の位相　第７回」『美育文化』Vol.42　No.11、1992年11月、60頁、「同連載第８回」『美育文化』Vol.43　No.1、57頁を参照。

7）同上連載『美育文化』Vol.43　No.4、58頁参照。

なお、高島の在籍年は『信州大学教育学部卒業生名簿』、1991年、21頁、『近代日本教育論集』第５巻、国土社　1974年５月、335頁による。また、志賀、芳川の在籍年は、金子一夫『近代日本美術教育の研究－明治時代』中央公論美術出版、1992年、566頁による。

8）『長野県教育史』第13巻1974年、528-529頁、大串隆吉「大正自由教育と青年自主化運動」（上）『教育』、No.386、国土社、1980年７月より抜粋。なお同稿は、（中）、No.387（同年８月）、（下）No.388（同年９月）と続く。

9）同上大串論文（上）47、48頁参照。

10）『下伊那教育会七十年史』1960年、558頁

11）年表作成にあたっては、以下の文献を参照した。

同上『下伊那教育会七十年史』483、559頁、『下伊那教育会史百周年記念』1987年、319-320頁、竜丘村青年会桐林支会調査部『竜丘村教育史』1934年５月、33頁、山越脩蔵編・上田市教育委員会『山本鼎の手紙』信毎書籍、1971年10月、148-172頁

12）山本鼎「童展の記」『信州』第10号、1919年11月、北澤小太郎「大正自由画教育と木下紫水」『伊那』1986年10月、木下「啓かれたる心」『帝国教育』1920年９月参照。

本格的な実践の開始は大正７年４月からだが、大正６年より試みは始まっていたようだ。

13）前掲註11）『山本鼎の手紙』148頁参照。

14）同上書171-172頁参照。

15）「日本に於る自由画教育運動の経過」『芸術自由教育』第２号、アルス、1921年２月、89頁

16）同上書99頁「自由教育協会消息」参照。なお、同第９号65、66頁の「協会員アドレス」によれば、協会員は、その後に畑耕一、平福百穂を加えた18名になる。

17）前掲註12）「啓かれたる心」参照。木下の授業像については、宇田「木下紫水の美術教育と自由画教育運動」『美術教育学』第11号、1990年３月を参照。

18）金子一夫「続・日本の近代美術教育史」（25）『美育文化』Vol.30　No.6、1980年６月、63頁

19）前掲註11）『山本鼎の手紙』166、171、192、193頁

20）『芸術自由教育』３月号、101頁参照。ここには、開催が２月下旬とあるが、誤りのようである。

前掲註11）『龍丘村教育史』33頁参照。

21）前掲註８）の大串論文（上）、（中）、（下）を参照。

22）同上大串論文（上）・（中）・（下）、前掲註12）北澤論文、『下伊那教育』105号、1975年７月、54頁、『竜丘村百年の歩み』1973年を参考にした。

23）『竜丘村誌』甲陽書房、1968年11月、1086頁

24）金岡秀友、柳川啓一監修『仏教文化事典』佼成出版、1989年10月、864-866頁

25）中内敏夫「日本の民衆教育と仏教思想」講座『仏教思想　倫理学　教育学』第３巻執筆代表　三枝充悳、理想社、1975年、300-311頁

26）前掲註11）『竜丘村教育史』33頁

27）前掲註22）『下伊那教育』105号、54頁

28）前掲註23）『竜丘村誌』1088-1089頁

ちなみに、小林の妹はメソジスト派の牧師の仲介により、長野県師範学校教諭で、同附属小学校の「研究学級」を育てたとされる杉崎瑢（1877－1943）と結婚している。（塩入隆『信州教育とキリスト教』キリスト新聞社、1982年12月、163-174頁）

29）前掲註８）大串論文（下）105-107頁

付記　本研究は、平成10年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）課題番号［10780130］（代表宇田）による研究成果の一部である。

The History of Teachers' Research on Drawing in *SIMOINA BRANCH OF SINANO KYOIKUKAI* in the latter half of Taisho Period

—With a Special Focus on the Process of Appreciation and Reformation of New Educational Trends and Methodology—

UDA, Hideshi
Nara University of Education

This paper is sequel to the one published in *The Journal for Society of Art Education in University* No. 30, 1998. Here, the focus is on the activitises of *SIMOINA BRANCH OF SINANO KYOIKUKAI* in Nagano Prefecture during the period from 1919 (Taisho 8th) to 1926 (Taisho 15th). In this Period teachers in *SIMOINA BRANCH* appreciated the curricula of the Ministry and started to reform them. In drawing class, they made pupils cease to draw carefully from model copies. Instead of that, they took their pupils out for walk and the pupils drew the landscape in the fields.

In the first part of this paper I examine the process of appreciation of new educational trends and methodology by the teachers. Teachers in *SIMOINA BRANCH* appreciated modern thoughts and pedagogy during the period from 1915 (Taisho 4th) to 1919 (Taisho 8th).

In the socond part, I examine the *JIYUGA* drawing educational movement in *SIMOINA BRANCH* during the period from 1919 (Taisho 8th) to 1926 (Taisho 15th). Sigeo KINOSHITA and his companions engaged in the study of *JIYUGA* drawing, children's song and composition eagerly.

In the last part, I examine the mental foundation of teachers in Tatsuoka Elementary School. The important point to note is that the foundation helps us to appreciate the teachers' activity in Tatsuoka School. Tatsuoka School had two groups of teachers with different mental cultures. One was founded on Buddhism and the other on Christianity. The two groups rivaled each other in belief, but they also cooperated with each other in the new education.